

形容詞語尾、形容動詞語尾、助動詞「ナリ」「タリ」「ダ」「デアル」

田 中 みどり

- 一 はじめに
- 二 形容詞語尾
- 三 形容動詞語尾
- 四 名詞文
- 五 「ナリ」「タリ」「ダ」「デアル」
- 六 私はコーヒーだ
- 七 まとめ

・形容詞の、原形「よし（良し）」の語幹は「よ」、原形「あし（悪し）」の語幹は「あし」である。
・状態副詞に、様態をあらわす「ニ」「ト」が接したものが、いわゆる形容動詞であって、状態副詞には「アリ」が付くものと付かないものがあるため、「アリ」の付くものを特にひとつの品詞と考えることは可能である。

・名詞を述語とする文につく「ニアリ」の「ニ」は場所をあらわす「ニ」で、「ニアリ」は「ニに於いてある」の意である。同じく「トアリ」の「ト」も場所をあらわす「ト」で、「トアリ」は「トという所にある」の意。これがつづまって「ナリ」「タリ」となるとき「アリ」は実質的意味から形式的意味に転じて〈陳述〉〈判断〉の意味をあらわす。

・名詞文の

ハ…ダ。

の文は、主述関係をあらわす文である場合と、述語成分の文だけである場合とがあり、「ダ」は〈断定の助動詞〉である場合と、〈文全体の陳述をあらわす〉場合とがある。

本稿では、小学館新編日本古典文学全集『古事記』（一九九七年）、小学館新編日本古典文学全集『日本書紀』（一九九四年～一九九八年）、岩波新日本古典文学大系『萬葉集』（一九九九年～二〇〇三年）、岩波新日本古典文学大系『新古今和歌集』（一九九二年）、を底本とする。ただし、萬葉集の訓については、適宜、勘案する。○印は歌の本文、◎印は訳、※は筆者の考えをあらわす。

一 はじめに

○花

という語には、

花の存在

人の措定

が含まれている。

○梅、在り。

という存在詞を述語とする文には、

梅自身の存在

梅自身のあり様

人が見た梅の一局面

人の判断

が含まれている。

○梅、咲く。

という動詞を述語とする文には、

梅自身の存在

梅自身の動作

人が見た梅の一局面

人の判断

が含まれている。

○梅、美し。

という形容詞を述語とする文には、

梅自身の存在

梅自身の属性

人が見た梅の一局面

人の判断（私は思う）

が含まれている。

○梅、厳かなり。

という形容動詞を述語とする文には、

梅自身の存在

梅自身の様態

人が見た梅の一局面

人の判断（私は思う）

が含まれている。

○梅は木なり。

という名詞を述語とする文には、

梅の存在

梅のあり様

人が見た梅の一面

人の判断（私は思う）

が含まれている。

存在詞は、存在をあらわすものである。

動詞には、

動作をあらわすもの ∷ 「咲く」「歩く」

作用をあらわすもの ∷ 「流る」「吹く」

状態をあらわすもの ∷ 「似る」「老ゆ」

形容詞には

状態をあらわすもの ∷ 「良し」「美し」

情意をあらわすもの ∷ 「うれし」「かなし」

形容動詞には

状態をあらわすもの ∷ 「厳かなり」「堂々たり」

がある。

存在詞「アリ」の実質的意味は〈存在〉であり、形式的意味は〈判断〉である。存在詞文の「在り」は、その中に実質的意味と形式的意味とをもっている。動詞文の「咲く」、形容詞を述語とする文の「美し」、形容動詞を述語とする文の「厳かなり」は実質的意味をもつものである。

動詞文「梅、咲く。」に「あり」が接した

○梅、咲けり。

という文は、いまだ「あり」が実質的意味を保った場合、〈現存〉をあらわし、「あり」が形式的意味をもつ場合には、〈判断〉をあらわす。^{（注1）}

形容詞というものは主観と客観の相対的な均衡の上に成り立つもので、形容詞を述語とする文「梅、美し。」の「美し」は花の属性であることと私の判断の間で強弱をもつて動くものであり、形容動詞を述語とする文「梅、厳かなり。」の「厳かなり」は花の状態と私の判断の間で強弱をもつて動くものである。形容詞のカリ活用は、連用形「ク」に「アリ」が接しているが、この「あり」には花の属性（あり様）をあらわす面と形容詞「美し」の述格性をあらわす面と私の判断をあらわす面とが含まれている。形容動詞は副詞に状態をあらわす「ニ」「ト」が接し（うらうらに、うらうらと。つれづれに、つれづれと。堂々と、さらに「アリ」が接して、ナリ活用・タリ活用を形成する（さ）にあり／さなり。かくなり。堂々たり）。この「アリ」にもまた、花の様態（あり様）をあらわす面と「厳かなり」などの述格性をあらわす面と私の判断をあらわす面とが含まれている。

二 形容詞語尾

存在詞・動詞は、語幹と語尾とが一体となつて意味を構成する。ところが、形容詞・形容動詞には、語幹用法と呼ばれる用法がある。奈良時代のものでは、

○あかたま（赤玉）

○ながち（長道）

○かなしいも（愛し妹）

○うれしさ（嬉しさ）

○あらたよ（新代）

などがある。平安時代以降には、

○あな、あさまし。

○あな、めづらか。

○をかしの御髪や。

○愚かの仰せ候や。

○うれしや。

などの例もあり、現代でも、

○痛（いた）（いたつ）。

○寒（さむ）（さむつ）。

○うれし。

○寂し。

○——元気？

——元気、元気。

○——きれい？

——きれい、きれい。

など、普通に使われている。語幹用法があるということは、すなわち、形容詞・形容動詞は語幹が意味の核をもつということである。

現在の学校教育の中では（清水文雄・松村明・真下三郎『対訳古典文法』1972年 第一学習社 を参照した）、古典語の形容動

詞は、

ナリ活用

基本形 静かなり

語幹 静か

未然形 なら

連用形 なり

終止形 なり

連体形 なる

已然形 なれ

命令形 （なれ）

タリ活用

基本形 堂々たり

語幹 堂々

未然形 （たら）

連用形 たり

終止形 たり

連体形 たる

に

と

已然形 (たれ)
命令形 (たれ)

のような活用をし、語幹用法を持つと説明され、形容詞のほうは、

ク活用

基本形 なし
語幹 な
未然形 く
連用形 から
終止形 し
連体形 き
已然形 けれ
命令形 かれ

シク活用

基本形 美し
語幹 うつく
未然形 しく
連用形 しか
終止形 し
連体形 しき
已然形 しけれ
命令形 しかれ

のような活用をし、語幹用法を持つと説明されるが、ただし、「シク活用の場合、終止形がク活用の語幹と同じはたらしきをする。」と説明される。これでは語幹用法という説

明に矛盾が生じる。

山田孝雄『日本文法論』^(注2)に、

形容詞活用一覧表

語幹

原形

用法

△ よ △ 形
△ △ 終止と
△ △ よし なる、
あし あし 語の本
て用ゐ
らる

未然形

用法

助詞

く

假定の
条件を
示す

ば

連用形

用法

助詞

く

句を重
ね、語
を重ぬ
中止の

形

假定の
条件を
示す

連体形

用法

助詞

き

體言に
重ぬ、
體言に
準ず

〇

體言に
重ぬ、
體言に
準ず

形

用法

助詞

「ぞ」「や」
等に對する終止

已然形

形 用法 助詞

〇〇

けれ 已定條

件を示 ども

す ども

「こそ」

に對する終止

とあり、これが、形容詞の活用表としてより良いものである。

上代の形容詞未然形語尾は「ケ」、已然形語尾は「ケ」で、連用形語尾「ク」、連体形語尾「キ」を含めてカ行音であり、終止形のみサ行音で行が異なる。これは、終止形が本来の形容詞の活用語尾ではなかったことを示唆する。形容詞のいわゆるク活用とシク活用の差を埋めるため、中世にはシク活用に終止形「あしし（悪）」のような活用形を生み出した。これと同じようなことが形容詞の原初にもあり、もともと装定することが役割であった形容詞が述定に用いられる際に、シク活用の「あし」は語幹のままに終止形となり、ク活用の「よし」はシク活用にならって語幹

「よ」に語尾「し」を伴って終止形となったものであろう。以上のことから、形容詞の活用を、次のように考える。

形容詞活用

原形	よし	あし
語幹	よ	あし
未然形	く	から
連用形	く	かり
終止形	し	かり
連体形	き	かり
已然形	けれ	けれ
命令形	かれ	かれ

シク活用において終止形が零表記となることは、原形表記があるので、問題ではない。

三 形容動詞語尾

形容詞と形容動詞とは、ものの性質や状態を述べるという点で似ている。形容詞を他の語が修飾する場合「いと美し。」のように連用修飾の形になるが、形容動詞も他の語が修飾する場合には、「いと厳かなり。」と連用修飾の形になる。これも、形容詞と形容動詞の似ている点である。しかし、現代語の丁寧語の場合には、

○花があります。

○梅が咲きます。

は「マス」となり、

○梅は木です。

○梅は厳かです。

は「デス」、

○梅は美しゅうございます。

は「ゴザイマス」を用いる（ただし、近年は「梅は美しいです。」も許容している）。この場合には、名詞を述語とする文と形容動詞を述語とする文とが、同じはたらきかたをしている。

山田孝雄は、いわゆる形容動詞を、情態副詞に説明存在詞を結合したものが相合して一の用言の如き用をなしたものである。^(注3)

※山田は「情態副詞」として、情態と状態とを含めている。一方、現代の文法書では「状態副詞」の用字が一般的である。内面的な「情態」、外面的な「状態」の二者を合わせて、筆者は「状態副詞」の用字を使用したいと考える。

状態副詞に、様態をあらわす「ニ」「ト」が接し（接したのもも状態副詞）、さらに「アリ」が接したものが、いわゆる形容動詞であって、状態副詞には「アリ」が付くものと付かないものがあるため、「アリ」の付くものを特にひとつの品詞と考えることは可能である。

また、形容動詞と形容詞の性格が似ているため、いずれも形容詞とする立場もあるが、形容動詞には、その出自の副詞と一続きの面をもつものもあるので、全く同じと見ることはできない。

その他にも、状態副詞には、

○飽き飽きする

○のんびりする

○ほけつとする

のように、「スル」がついて状態をあらわす動詞になるものがあり、形容動詞にも、

○退屈する

○満足する

などのように、語幹に「スル」がついて、状態をあらわす動詞になるものがある。形容詞にはそのようなはたらきはない（形容詞に「スル」がつくと、「美しくする」などのようになり、この場合の「スル」は動作性の動詞である）。

一方、形容動詞と（名詞＋なり・たり（だ、です））とが、形が同じであるところから、形容動詞語幹を名詞の一として、（名詞＋なり・たり（だ、です））と同じ扱いをする説もあるが、漢語由来の「退屈」や「徒然」など一部のものを除き、「厳か」や「静か」など多くの形容動詞語幹

は主語になることができず、また、形容動詞を他の語が修飾する場合には、形容詞の「いと美し。」と同じように「いと厳かなり。」と連用修飾の形になる点が、名詞とは異なっている。右に、状態副詞に、様態をあらわす「ニ」「ト」が接し（接したのもも状態副詞）、さらに「アリ」が接したものが、いわゆる形容動詞であると述べた。「ナリ」「タリ」と熟合した形は同じであっても、形容動詞語尾の「ナリ」「タリ」と名詞につく「ナリ」「タリ」とでは、もとの「ニアリ」「トアリ」の意味が全く異なるものなのである（後述【四】）。

四 名詞文

名詞文は、

○琴頭に 来居る影媛（枳謂屢箇皚比謎） 玉ならば あが欲
る玉の 鮑白玉（婀我哀屢施摩能 婀波寐之羅陀魔）

〔紀92歌謡〕

のように、「A、B。」の形に始まる。また、主語に「ハ」が入るものがある。

○大和は 国の真秀るば（夜麻登波 久爾能麻本呂婆）

〔記30歌謡〕

次に、述語を指し示す「ソ（ヅ）」を用いるものがある。

○わが心 浦渚の鳥ぞ（和何許々呂 宇良須能登理叙）

〔記3歌謡〕

○うまし国そ あきづしま 大和の国は（怜何国曾 蜻蛉嶋
八間跡能国者）

〔萬葉一・2〕

次には、判断をあらわす「ニアリ」ナリ」「トアリ」ナリ」を用いるものがある。

○一つ松 人にありせば 太刀佩けましを（比登都麻都 比登
邇阿理勢婆 多知波気麻斯袁）

〔記29歌謡〕

○わが背子が 来べきタなり（和鐵勢故餓 勾倍枳予臂奈利）

〔紀65歌謡〕

現代では、主語に「ハ」「ガ」を、文末に「ダ」「デアル」を用いるのが普通である。

イ A、B。 AハB。

ロ A、Bソ。 AハBソ。

ハ A、Bニアリ。 AハBニアリ。

A、Bトアリ。 AハBトアリ。

ニ A、Bナリ。 AハBナリ。

A、Bタリ。 AハBタリ。

ホ AハBダ。 AハBデアル。

AガBダ。 AガBデアル。（AガBデス。）

「ソ（ヅ）」と「ニアリ、ナリ、ダ」「トアリ、タリ」は性格を異にする。そこで次に「ソ（ヅ）」と「ニアリ、ナ

リ、ダ」「トアリ、タリ」について考える。

萬葉集卷一に、

○ 天皇詔内大臣藤原朝臣、競憐春山万花之艶、秋山千葉之彩、額田王以歌判之歌

冬ごもり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ 咲かざりし 花も咲けれど 山をしみ 入りても取らず 草深み取りても見ず 秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば 取りてそしのふ 青きをば 置きてそ嘆く そこし恨めし 秋山そ吾は

〔萬葉一・16〕

◎ 天皇が内大臣藤原朝臣に、春山に咲き乱れる万花のあでやかさと秋山をいろどる千葉の彩りと、どちらに深い趣があるかとお尋ねになった時に、額田王が歌で判じた歌冬が過ぎ春が来れば、今まで鳴いていなかった鳥も来て鳴き始める。今まで咲いていなかった花も咲いている。けれど、山に木が繁っているのでも山に入つて花を取るのでもなく、草が深いので花を取って見ることもしない。一方、秋山の木の葉を見ると赤や黄にいろいろいた葉を取って賞で、青い葉は置いて嘆く。そのことが満たされない気持ちになります。(秋の木の葉は、このように、手に取って見もし、あれこれと心を砕くものです。)だから、深い趣があるのは秋山のほうである、とわたしは思います。

がある。「春山万花の艶」と「秋山千葉の彩」のどちらに

深い趣があるか、ひいては、「春」と「秋」とどちらに深い趣があるか、「春」のうちでは何に深い趣があるか、のような問いかけは、とりわけ漢詩との比較で、歌人たちの間にしばしば行われたものであったろう。「春山万花の艶」と「秋山千葉の彩」のどちらに深い趣があるか、という問いに対して額田王は「秋山そ吾は」と応える。「わたくしの」判断である。

「ソ(ゾ)」は強く指し示す係助詞である(今の場合には述語に用いられていて終助詞となる)。言語者の「私が思う」内容を指し示すのであるが、「吾は」があるのでさらに明確になる。「深い趣のあるのは秋山のほうだとわたしは思います」——主題は「趣があるのは」であり、「わたくしは」の「は」は、他と区別する係助詞である。

右に挙げた

○ 天皇登香具山望国之時御製歌

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち
国見をすれば 国原は 煙立ち立つ 海原は かまめ立ち立
つ うまし国ぞ あきづしま 大和の国は 〔萬葉一・2〕

◎ 天皇が香具山に登つて国見をされた時の御歌

大和にはたくさん山があるが、最も近い天の香具山、そこに登り立つて国見をすると、平野には炊煙があちこちに立っている。海原には鴉がそここに飛び立っている。素晴らしい国であるよ。(あきづしま) 大和の国は。

の「うまし国そ あきづしま 大和の国は」は

A B B

の形（倒置）になっていて、「大和の国は」の「は」は他と区別する係助詞であるが、「大和の国」が主語になっているものである。訳に「素晴らしい国であるよ」としたが、「よ」が「私が思う」をあらわす。

次に。「ナリ」は助詞の「ニ」に「アリ」が接したものである。

○尾張に 直に向かへる 尾津崎なる 一つ松 吾兄を 一つ

松 人にありせば 大刀佩けましを 衣着せましを 一つ松

吾兄を

〔記29歌謡〕

○尾張にまっすぐ向いている尾津崎にある一本松、お前よ。一

つ松が人であったなら、大刀を身につけさせたいものを。衣を着せたいものを。一つ松、お前よ。

○わが背子が 来べき夕なり ささがねの 蜘蛛の行ひ 今夕

著しも

〔紀65歌謡〕

○今夜は夫がきつと来る夜だ。（ささがねの）蜘蛛が巣をかける行いがはつきりしているから。

「ニアリ」の「ニ」は場所をあらわす「ニ」で、「ニアリ」は「に於いてある」の意である。同じく「トアリ」の「ト」も場所をあらわす「ト」で、「トアリ」は「という所にある」の意。これがつづまって「ナリ」「タリ」となるとき

「アリ」は実質的意味から形式的意味に転じて〈陳述〉〈判断〉の意味をあらわす。^{〔注4〕}

形容動詞の「ニアリ」「トアリ」が、様態をあらわす助詞の「ニ」「ト」に「アリ」が接したものであったのと、それは異なっている。

五 「ナリ」「タリ」「ダ」「デアル」

名詞文の「ナリ」「タリ」は、文が成立するために必須のものではなかった。名詞文は「A、B。」でも成立し得たものであったが、「ナリ」「タリ」をつけることによって、一文の主語・述語が明確になる。やがて、それが名詞文の一般的な形になると、「ナリ」「タリ」は陳述をあらわす語の性格を獲得する。

○梅、木なり。

という文には、

梅の存在

梅のあり様

人が見た梅の一局面

人の判断（私は思う）

が含まれているが、とくに、

梅のあり様

と

人の判断（私は思う）

とが表面にあらわれる。命題的な文でなければ、多くの場合、

梅のあり様

を述べる文ということになる。「私の判断」を示す場合、

○梅、木なるなり。

と、さらに判断の「ナリ」を用いることもある。この判断の「ナリ」は、他の述語をもつ文にもつくことができる。

○梅、在るなり。

梅、咲くなり。

梅、美しきなり。

梅、厳かなるなり。

「ナリ」には、このような用法もある。

形容動詞の「ニ」と名詞に接する「ニ」とは、原の意味が異なっているのであるが、「ニ・アリ」が「ナリ」に熟合してしまうと、その活用のかたは同じになる。ちょうど、

○駿河なる富士の山

の「ナリ」が「ニ在リ」の意でありながら、これらと同じ形に見えるのと、それは同じことである。

現代語では、「ナリ」は「ダ、デアル」の形になる。

○梅は木だ。

に対し、

○梅は木である。

のほうが、より説明的となるのは、「アリ」に判断の力があるためである。さらに、

○梅は木なのである。

梅は木であるのである。

となると、下の「である」には私の判断があらわされる。

○梅が在るのである。

梅が咲くのである。

花は美しいのである。

花は厳かなのである。花は厳かであるのである。

六 私ばコーヒーだ

しかし、名詞の文と形容動詞の文とは全く同じではない。すでに言われているように、名詞化したものを除き、多くの形容動詞の語幹は主語に立つことができない。さらに、次のような違いがある。

○梅は木だ。

と

○梅は厳かだ。

は述語が主語について述べた文で、同じはたらき方をして

いる。名詞の文が、

○私は学生だ。

ならばどうか。

○梅は木だ。

は、主語の分類区分をいうものであるが、

○私は学生だ。

は、主語の身分をいうものである。いずれも「ハ：ダ」で主述関係を構成している。次に、

○私はコーヒード。(レストランにて)

ならばどうか。コーヒードが話をしていたり、劇中の役の話ではないから、「私」は主語ではない。一つの場合は、

○あなたはジュースにしますか？

と聞かれたときに「いや、自分はコーヒード。」と断言するときである。この場合、「は」は他と区別する係助詞であり、「だ」は断定の助動詞である。その主題は、

飲み物は

注文するものは

である。

次に、二つ目の場合。二人以上の人がその場に居合わせるときに、

○——私はコーヒード。

——僕は紅茶です。

のように言う場合である。この場合、「は」は他と区別する係助詞である。その主題は

飲みたいのは

注文するものは

である。「私はコーヒード。」と言うとき、その主題「飲みたいのは」「注文するのは」は、「コーヒード」を導く。「私はコーヒードを飲みたい。」「私はコーヒードを注文します。」であつても伝えたいことは同じであるが、「飲みたい」「注文します」が「ダ」の意味となるのではない。そして、この場合、「注文するものは」と相関して「ハ：ダ」となるのであつて、「コーヒード」の「ダ」が「私は」の「ハ」と相関して「ハ：ダ」となるのではない。主題の「注文するものは」が言われていないのであるから、「私は」と「コーヒード」とは主述関係としてはつながらない。「コーヒード」の「ダ」は、「注文するものは」を含めた文全体の判断ということになる。一つ目の場合には「ダ」は断定の助動詞であつたが、この場合の「ダ」は、断定の面ももちながら述語性を明示するはたらきをもつものである。

「私はコーヒード。」はまた、「私はコーヒード。」さらに「私、コーヒード。」と言つてもよい。このとき、「私はコーヒード。」の「ハ」は「私」の中に含まれ、「ダ」は「私、

コーヒー。」の中に含みこまれている。

また、「私、コーヒー。」は、

○私がコーヒーだ。

の意味であることもある。この場合には、「コーヒーを注文したのは誰なのか？」という問いに対する答えで、「ガ」は《特示》のはたらきをもつ。

額田王の「秋山そ吾は」の「ソ」は「秋山」を指し示す語で、この場合は終助詞になっていた。「私はコーヒーだ。」の「ダ」は、「ソ」と同じようなはたらきもちつつ、「注文するのはコーヒーだ。」の「ハ：ダ」という構文において、「コーヒー」を述格に立てる働きをもつ。また、「僕は紅茶です。」の「デス」は、「ソ」と同じようなはたらきもちつつ、文全体を敬語性で包む。「デス」が文全体を敬語性で包むのと同じように、「私はコーヒーだ。」の「ダ」も、文全体の述格をも担っているのである。これが、名詞につく「ナリ」「ダ、デアル」のはたらきであって、形容動詞を述語とする文

梅は厳かだ。

の「ダ」が「厳か」の陳述にはたらくのは、異なっただけである。

別の言い方をすれば、名詞文の

ハ：ダ。

の文は、

と、主述関係をあらわす文である場合（「梅は木だ。」）

と、述語成分だけの文である場合（「私はコーヒーだ。」）とがあり、「ダ」は

断定の助動詞

である場合と、

文全体の陳述をあらわす

場合とがある、ということである。

そして、「私はコーヒーだ。」の「ダ」は、断定の助動詞であることを含めて、文全体の陳述をあらわしている。

七 まとめ

以上、述べてきたことをまとめると、

・存在詞・動詞は、語幹と語尾とが一体となって意味を構成する。

形容詞・形容動詞には語幹用法がある。これは、形容詞・形容動詞は語幹が意味の核をもつということである。

・形容詞の活用は、

である。

また、形容動詞と形容詞の性格が似ているため、いずれも形容詞とする立場もあるが、形容動詞には、その出自の副詞と一続きの面をもつものもあるので、全く同じと見ることはできない。

は実質の意味から形式的意味に転じて〈陳述〉〈判断〉の意味をあらわす。

・名詞文の「ナリ」「タリ」は、文が成立するために必須のものではなかった。名詞文は「A、B。」でも成立し得たものであったが、「ナリ」「タリ」をつけることによって、一文の主語・述語が明確になる。やがて、それが名詞文の一般的な形になると、「ナリ」「タリ」は陳述をあらわす語の性格を獲得する。

ハ
ダ。

断定の助動詞

文全体の陳述をあらわす

そして、「私はコーヒーだ。」の「ダ」は、断定の助動詞であることを含めて、文全体の陳述をあらわして

いる。

注

1 拙稿「存在詞『あり』に就いて」 1978年 三船祥二郎
教授古稀記念論文編集委員会編『現代社会と人間の諸問題』
所収。

2 山田孝雄『日本文法論』 1970年復刻版発行 宝文館出版
二四五頁。

3 山田孝雄『日本文法學概論』 1935年 宝文館出版 三八
五頁～三八六頁。

情態の副詞は既に述べたる如く、その意義に於いて形容
詞に似たるものにしてたゞ陳述の能力の存在せぬものなる
が、今これに説明存在詞を結合すれば相合して一の用言の
如き用をなすに至る。これその陳述の能力は存在詞により
て附與せられたるによるなり。それらの例次の如し。

偉大なり。 暖かなり。

漠然たり。 藹々たり。

かくしてこれらは助詞「に」を伴ふべきものは「なり」を
伴ひ、助詞「と」を伴ふべきものは「たり」を伴ひ、相合
して形容詞に似たる意義と用とをあらはすものなり。か
る場合にはその副詞は、修飾格に立てるものにあらずして
資格に立てるものなりとす。

4 拙稿「存在詞『あり』に就いて」 1978年 三船祥二郎
教授古稀記念論文編集委員会編『現代社会と人間の諸問題』
所収。

5 拙稿「同格のガ・対象を指し示すガ・特指のガ」 2019

年 『京都語文』第27号 所収

6 三に掲げた額田王の「冬ごもり：そこし恨めし 秋山そ吾
は」という歌の「秋山そ吾は」も、これと似た構文である。
「秋山そ吾は」の主題は「趣があるのは」である。「吾は」は、
「吾」の判断を他と区別したものである。枕草子第一段の、
○春は曙。：夏はよる。：秋は夕暮。：冬はつとめて。：

〔枕草子一段〕

の主題も「趣があるのは」である。「春は曙。」は、万人に納得
されるものであれば「皆が思う」のであるが、清少納言の好み
を反映して「わたくしが好きなのは」の雰囲気も漂わせる。清
少納言の「秋は夕暮。」の主題は「趣のあるのは」であり、「秋
は」は春夏秋冬の移り変わる景物の中で「秋ならば」と他の季
節と区別する。この場合「ハ」は、「私はコーヒード」「僕は紅
茶だ」の「ハ」と変わらない。しかし、清少納言の好みを反映
した「わたくしが好きなのは」が主題であるとするならば、
「わたくし」は主題を構成する要素であるため、「ハ」は「私
は」「僕は」の「ハ」とは異なる。枕草子という書物は、筆者
の思い入れが深いという性格をもった書物であるため、一つの
文に二様の見方ができることになる。

また、新古今集卷一・春歌上の、

○ のこども詩を作りて歌にあはせ侍しに、水郷春望
といふことを 太上天皇

見わたせば山もとかすむ水無瀬河ゆふべは秋となに思ひ
けん 〔新古今一・36〕

の「ゆふべは秋」の主題もやはり「趣があるのは」である。後
鳥羽院は、通念のとおり「夕べは秋」と思っていたけれど、こ
の春の夕べもいいではないか、と詠っている。この場合は、通

念として「夕べは秋」があるので、「趣があると思っている」のは「皆」であり、後鳥羽院は「わたくしも思っていた」のであって、話は少し複雑になる。後鳥羽院の「夕べは秋」の主題は「趣のあるのは」であり、「夕べは」は一日の時間の中で朝や昼や夜と区別する。通念としての「秋は夕暮」の「ハ」は、「私はコーヒード」「僕は紅茶だ」の「ハ」と変わらない。「その通念のようにわたくしも思っていた」と言うときには、「皆が思う」「わたくしも思う」を含む。